

職
歴

昭和二十四年十月 ナホトカ港より
舞鶴港に無事復員す

商業高校卒業後、京都市の織維会社
に勤務、後、広島に入営

昭和二十五年から十二年間松江市白

潟本町 今村商事に勤務

昭和三十七年より 福田商事株式会
社設立、社長として現在に至る

(島根県 坂本 昇一)

シベリア抑留体験記

島根県 塚 田 信 雄

一 はじめに

旧ソ連の独裁者スターリンは米英と密謀し、その結果、不可侵条約を締結し中立の立場であるのにも関わらず一方的に破棄し、我に倍する大軍を侵攻させた。それは敗戦間近の我が国の情勢を予測し、自国の利権を得るのを目的とした参戦に外ならない。その証拠は、関東軍を初め備蓄したありとあらゆる物資を略奪したことだ。さらに軍將兵約六十万の大軍を戦後において、国際法を無視し我々を騙し続け、集団拉致した。そのうえ飢餓と強制労働が原因で約六万人死没させる。この国家的犯罪は、いかにエリツイン大統領が国会で謝罪しても言葉だけで全く誠意がない。私は四力年抑留され運よく帰国し今日があるが、二十〜三十

歳代の若さで故郷を夢見ながら死没した戦友を思うと、憤激の念に堪えない。戦後六十年を過ぎ、敗戦の混乱期の出来事とは言え、政府はもちろん、国会もマスコミも関心なく風化している。この世界史上類のないソ連の悪業を歴史的事実として後世に伝えたい。

二 入隊から終戦後の情況

昭和二十（一九四五）年三月十五日、最後の現役兵として北滿の国境守備隊へ入隊した。そして、三カ月の検閲（平時六カ月）の猛訓練が終ると同時に約三週間、暗号の促成教育を受け、黒竜江岸の対岸監視哨（兵員約二十五人）へ配属される。そして僅か一カ月ぐらいにして、八月九日早朝ソ連軍が侵攻してきた。この事は対岸の状況と情報により分っていたので数日前から完全軍装で待機した。さらにマーチョ（満馬付荷車）を徴発して兵器を初め一切の物資を積み込み撤退準備していた。当日夜明けを待たず、全員、馬の手綱を引き出発して間もなく敵の戦闘機が飛来し南方に向う。

この非常事態、いつ敵の部隊が追跡するか知れず、約十五キロの部隊陣地に到着した安堵感言葉に表現できない。その後一週間くらい、山頂の地下陣地が後方なので時たま空爆を受ける程度で、何もする事のない毎日だった。しかし当時の北滿は真夏なのに毎日大雨が降り続き、戦争も雨が降らねば楽で良いと思つた。

特に困つた事は、三度の食事は山麓の兵舎から運搬し、それは初年兵の仕事で雨具はなく濡れ放題で、その都度新品の被服と交換したものだ。そのうち軍使が二、三回来て、信用しない部隊長を天皇陛下命令であると説得し、敗戦を認め武装解除に应ずる事になった。ソ連兵立会いのもと、兵は小銃を初め一切の兵器、将校は高価な軍刀、親が調達したもので、それをうず高く積上げ、敵の重戦車が押し潰す場面は複雑な心境で、特に将校の残念そうな顔は見られない。しかしながら我方は戦闘機が一機も飛ばず、もちろん戦車も全然出動せず、全く無抵抗の情けない状態であつた。

そして約三十キロ、師団司令部のある孫呉へ徒歩で移動して、ここで高級将校の一戸建ての住宅で二十五人前後が分宿する。ところが、個人住宅で炊事器具はない。仕方なく五右衛門風呂で米飯を焚いたところ、燃料は石炭なので火力が強く黒コゲ飯を食べたことがある。そして約二十日間、関東軍の約三カ年分の備蓄物資の貨車積み作業をさせられた。この作業が完了後、一千人単位の作業大隊を編成し、行く先も分らぬまま約三十キロ行進し、黒龍江岸に着く。途中、軍の空兵舎と、日本兵に加えて満州の人馬の死体を各地で発見し、戦争の悲惨さを見た。ソ連参戦は現地人にも被害を与えた。

三 シベリア抑留の始まり

シベリアは起伏の緩やかな草原に併せて耕地が果てしなく続き、コルホーズ（集団農場）が点在し、農畜産を共同経営で生活していたようだ。住む家は至って粗末な木材造りで、公共性の建物は見られなかった。女子供が数多く、働き盛りの男

性は少なかつた。子供達は素足で、着る物は粗末でみすばらしく、戦勝国の偉容は全くなく、どうしてこんな貧乏な国に負けたか不思議に思った。我々はお出発の際、新品の靴下二足に白米を詰め込み、それに乾パン等の携帯食料と日用品等毛布を携行する。当時シベリアも満州と同様雨が多かつたのか、道路はどろどろで歩く事ができず、両側の草叢を歩く。飲み水などある筈がなく、草地の凹地で見つけると我先に飲んだものだが、運よく腹痛を起す者は一人もいなかった。

入ソしてから泊る建物などあるはずがなく、各自所持の一枚の毛布をテント代用とし、残りの毛布で体を寄せ合つて寝るしか方法がない。ところがシベリアは大陸性の気候で、日中は良くても夜中は急激に冷え込み、寒くて寝られない。仕方なく枯れ枝か乾草を探し求め、チョロチョロ焚火しながら朝を待つ。二、三日野宿を繰り返し食料も底をついたころ、最初のコルホーズに着く。早速翌日から馬鈴薯掘りをする事になる。なぜ日本兵

がしなければならぬかと腹立たしくて仕方がないが、抑留の身なれば止むを得ない。主食は芋だけで、岩塩以外穀物の支給はなく、これを煮たり焼いたりして食べる。しかし、いかに空腹でも毎食同じ方法では嫌になり、生活の知恵を働かせ、芋の皮をむき、警備兵の捨てた缶詰の内側から釘で穴を開けジョレン代用をつくる。それから生芋をすりスイトンにして食べるといくらか食べ易くなる事が分った。朝食が済むと中隊ごとに芋掘り作業に出発する。馬鈴薯畑は一區画が約二〇〇ヘクタール、横一列に並び茎を引き抜き木製のへらで掘り出し、柳条で作製したカルチンキ（ザル）に入れて、三〇メートル間隔に大型トラック一台分ぐらい集積する。トラックが入り、積み込み作業も過酷な肉体労働で、作業が終わらないと帰してくれないから腹ペコの中、頑張るしかない。掘り取りも人に遅れないようにするには多少残っても仕方なく前進のみで、食も不十分な強制労働だから当然だろう。二、三日野宿して終ると、次の

コルホーズに移動する。ある日珍しく野菜畑（胡瓜、トマト、人参等）へ収穫に行き、監督の目を掠め腹いっぱいかじったものだ。大豆畑へ行つた時は監督の不在を利用し、上着を広げて棒で叩き殻を風で飛ばし、どのポケットもいっぱい詰め込み、明日の腹の足しにしたものだ。ところが食べ過ぎて下痢をする者が続出し困つた事があつた。

シベリアの秋は短く、昨日まで色づいたと思うと、四、五日で散つてしまう。十月に入り木枯らしが吹き、小雪がチラチラして寒い冬が近づくと思うと心は淋しくなる。もはや、孫呉を出発してから二十日以上たつのに、いつシベリア鉄道にたどり着きダモイできるか不安な毎日を過ごしたが、ようやく炭坑町ライチハに着く。ここは鉄道駅と大きい倉庫らしい建物が各所に無数に建ち並び、民家も多くかなりの街のようだ。いよいよシベリア本線でウラジオ経由でダモイできるかと思うと嬉しくなる。ところが人員点呼が終り出発すると、だんだん駅から離れて行くではないか？ 貨車が

入るまでどこかで待機するのであろうと思いが、一時間くらい歩き続ける。そして先頭に続き進み、右手を見ると大きい河が見え、左手は引込み線が道路に並行して架設してあるが、最近使用した形跡がない。さらに進むと小高い石山が現われ、

山が崩され採石場らしき所が見えるではないか？これでやつと気が付き、我々は騙されてこの石切り場で労働させられるため連行されたのだと分った。今まで通訳を通じて聞けば異口同音に「ヤポンスキー、東京ダモイ」と言っていたので情けない事この上ない。何年働き帰国させてくれるのか全く分らず暗澹たる^{あんたん}気持ちになる。

四 ブレーヤーの石切り作業

我々はライチハを出発する際二分され、五百人の集団となりブレーヤー河畔の木造で大きくて古い建物に入る。脱走を監視するため四方に望楼を建てて昼夜交替で警戒し、正門には衛兵所があり出入者をチェックしている。またラーゲルの周囲は三メートルくらいの丸太を三、四メートル間隔に

有刺鉄線で張り、さらに内側にも同様の方法で筋違いに張り巡らす。そして内外柵の距離が二、三メートルあるので、その間に砂を敷き、入れば足跡がつき、犬猫以外の出入は不可能である。

着いた翌日から我々の生活する建物の修理、修繕をする羽目になったが、ソ連人の囚人もおり、共に働いた。ラーゲルの一部に百人は入れる大型トイレができ、その一隅の個室を収容所長以下幹部が使用していた。便槽は深いので当初は爆弾投下してもお釣りが来ないが、溜まると芝草か木の枝を入れて予防策を講ずる。また両足下は長くて厚い板を使用し、落ちる心配はなかった。

冬期間は凍結して山が高くなるからバールで突き崩し柳条製のザルに入れて廃棄するが、凍結して石ころ状態になっており、汚い感じがなく、この作業は軽労働の人の仕事であった。そのうちに医務室が開設され、日本の軍医、衛生兵が勤務したが、責任者はあくまでソ連の女軍医である。医療技術ははるかに我が方が上のよう。彼女の診察方

法は、尻の肉をつねって肉付きの有無で健康度を決めていたらしい。即ち一、二級は所外の労働、三、四級は所内の軽労働で栄養食を与えていた。

私は入所して芋掘り作業のためか、右手の薬指が化膿し痛いので診察を受けたところ「指瘡瘡」と診断され、約三カ月休養し戦友から羨ましがられる。しかし、手術の際は医療器具がなく安全剃刀で切開したから物凄く痛く、今でも切り跡が残り、寒い時指を使うと半世紀後の今日でも痛みを感じずからとんだシベリア土産になる。またソ連の軍医は、風邪をひき、いくら咳が出て苦痛でも熱が三八度以上ないと作業を休ませてくれない。しかし、このような境遇でも帰国する目標があるから、作業事故を含め一年半の死亡者は五百人中六人で、他のラーゲリより死亡率は低く喜ばしいことであった。

入所して一カ月くらい経過したころ、正式に抑留者の給与規定が決められた。主食は朝夕雑穀（高粱、大麦、小麦、蕎麦、大豆、小豆、玉蜀黍等が

原料）。それに三食用のスープの材料は野菜類（キヤベツ、人參、胡瓜、茄子、南瓜、主として馬鈴薯）。魚類は鱈、羊豚肉が入ることもある。しかし、すべて人員に応じてカロリー計算で支給するので、量的に少なく、全部ブツ込んで雑炊にする以外に方法がない。また、雑炊とスープの場合も各班ごと炊事場で配分するが、大釜で幾ら混ぜても最初は中身が少なく、底に近づくとき中身が多くなるから、当番は時間内になるべく遅く行くようにした。理由は分らないが、日本の祝祭日に主食用に白米を特別支給したが、おそらく関東軍の備蓄物資の一部だろう。特に当番が神経を使ったのは昼食用の黒パンの配分だろう。皆飢えているから食については極めて敏感だ。だから当番は公平を期し、全員の前で黒パン（長方型三・八キロ）を包丁で切断して等量を定め、竿秤さおばかりを作り、配分は抽選する。パンの中より切り端の方が固くて歯ごたえがあるから、それが当たれば喜んだものだ。

また、入隊前、社会的地位の高い人とか年配の人

が食に対し汚い行動をする事が多かった。例えば病人が枕元に置いたパンがいつの間にか紛失し、その犯人は前述の人達だ。過半数が二十代の若者の集団生活であるのに、色気話はなくただ食い気一辺倒で、ぜんざいとか、餡たっぷりのぼた餅など、甘い物の話に花を咲かせ、唾を飲み込み寝る毎日だ。

シベリアの大地が凍りつき、ブレヤー河が凍結シトラックが木材を積み走る十二月ごろからいよいよ石切り作業が始まることになり、酷寒期に入り、防寒具（日本兵、開拓団員の使用した綿入れ）の不備な冬期の労働に不安を感じる。出発は寒暖に関係なく日曜以外八時出発、十七時過ぎ、隊列の前後に警備兵が付き帰って来る。作業現場はラーゲリから約一キロの所にあるが、石切り場の下に引込み線があり、ブレヤー駅に通じている。作業は中隊ごとに持ち場が定められ、ソ連人の監督が常時付き、「ダワイ、ダワイ」を連発し作業を急がせ、抑留者の悲哀をつくづく感ずる。作業は岩

山を崩し、大石はコンプレッサーの削岩機で穴をあけ、その中にダイナマイトを詰め込み発破をかけ、大割りしたものを大ハンマーで砕く。機械器具を使う技術的な仕事はソ連人がやり、我々は石の大小を分類し、ターチカ（車輪だけ鉄製で、白樺、カラ松等厚板の一輪車）で引込線置場まで運搬して、定めた五立方メートルに積み上げる。ターチカは木製で相手が石だから度々破損するので、修理専門で六十歳くらいの大工がいた。道具は斧だけで切る、削る。器用にやっつてのけた。

ある日突然「ギヤァー」と悲鳴を聞き駆けつけると、岩に挟まれて苦しんでいるではないか？慌てて数人でボールを差し込みこじ開けようとするが、なかなか思うようにいかない。ようやく引き出し、即製担架を造り医務室に運んだが内臓破裂と出血多量で死亡した。誠に痛ましい犠牲で、共に帰国を待ち望み苦勞したのに残念であった。

このように危険性の高い馴れぬ重労働はソ連側も配慮し、我々も注意し、それ以降このような事

故はなくなる。シベリア抑留生活の初期、最も腹立たしい事は、着たきり雀の我々を約半年の長い間、非人道的に入浴と衣類の交換をしてくれなかった事だ。そのため虱が大発生し、疲れて作業から帰り夕食後、全員下着を脱ぎ虱取りの風景は、苦々しい思い出の一つだろう。その後ソ連当局は、一週間に一回のシャワー入浴と、衣類の煮沸消毒等幾分改善された。

約一年半のブレヤーの石切り労働とも別れを告げ、全員、ライチハラゲリ（収容約一万人）へ移動する。

五 ラーゲル生活と炭坑労働

ライチハで我々を迎えたのは「日本新聞」で、洗脳された民主運動で、赤旗と革命歌の波であった。かつての将校は「特権階級、反動分子」として糾弾され、別棟で生活し労働していた。

ここライチハ市（ライチヒンスク）は数十キロ四方、どこを掘っても石炭が無尽蔵といわれ、人口約五万、東シベリア有数の露天掘りの炭坑街で

ある。また、ラーゲリ内も大集会場、バザールとサナトリウム、病院等の施設も完備している。その反面、民主運動も極端に進み、共産主義教育も徹底している。その一例として、旧憲兵、将校、特務機関員は反動分子として名指しをされ、大衆の面前で自己批判させられる。日本兵の中で適任と指導部が認めた者をハバロフスク市前衛学校（共産主義教育）へ六カ月派遣を繰返し、修了後、出身中隊へ帰り、アクチーブと称し、我々を教育する立場になる。いくら作業に疲れても夕食後、彼等の講義を約一時間くらい受けねば「反動分子」のレッテルを貼られ、帰国に影響すると思うからこそ仕方なく受講する。

宿舎は半地下方式で、屋根は丸太で合掌建てとし、板で葺き、その上に土を盛り、所々に煙突が出ており、燃料はすべて石炭で、所内はブレヤーと同じく二段ベッドであった。我々は二十五人単位にブリガード（作業班）を編成し、日曜日以外は中隊ごとに朝八時に出発して夕五時半ごろ帰っ

てくる。仕事の内容は、炭面清掃（表土三メートルくらい機械で除去した残土の処理）と線路横行（引き込線のレールを枕木をつけたまま、各自バールを持ち、班長号令により一声に移動させる作業）の二種類だが、食も不満足な我々には大変きつい重労働であった。炭層の表土掘り等、機械を使う技術的な作業は一切ソ連人がやり、我々は雑役だ。採掘する機械はショベルカーで、よく見ると神戸製鋼のプレートが貼り付けてあるから日本製で、撫順炭坑あたりで戦利品として掠奪したものと思う。我々の作業内容は、ショベルカーからのこぼれ土とか、炭面の残土を箒のような物で箇所ごとに掻き集めすくい易いようにする。仕事はソ連人も共に働き、暖房用石炭を、毎日の事だから少量ずつ担いで帰るのは我々と同様だった。収容所に大浴場があり、石炭が豊富なため度々入浴でき、ブレイヤー時代が嘘のように思われる。食事もだんだん良くなると同時に、作業ノルマの向上を要求してくる。我々にも糧秣の支給と共に

賃金の支払いがあり、ノルマ達成率によって増減があるから、人間として欲望には勝てず本気で働いたものだ。具体的には、それぞれの作業班が突撃隊とか、行動隊の隊旗を持ち、競争してノルマの向上に努めた。

日曜日には野外演芸場で音楽会か演芸会、時には劇団の上演等。多くの日本兵の中にはプロがあり、芸は身を助けるの諺のとおり、青木洗一さんは当局の許可のもと、作業免除で芸能活動していた。ある晩、天然色映画が上映されて「カーメン・ツベトーク（石の花）」と言う題名で、初めてカラー映画を見てビックリし、ソ連の映画技術の進歩に驚く。また、ハバロフスクの日本新聞社から日本兵洗脳のため新聞が度々配送され、アクチーブ活動は益々活発化する。そして、レーニン、スターリンと併せて共産主義社会を極端に賛美し、「我らのソ同盟こそ祖国だ」「天皇制の廃止」「ブルジョアとプロレタリアートの階級闘争に立ち上ぐれ」とか、気の狂ったようなスローガン、壁新聞

がペタペタと貼られた。学習会も再三行われ、参加しないと反動分子としてダモイの障害になると思うから仕方なく参加せざるを得ない。作業の日は現場の休憩小屋で昼食をとるので班に一人、炊事係が決められ、朝出発前、人員分の黒パンとスープの食材を昼食用として受領する。ところが、炊事係は作業をしなくても良いから希望者が多く選挙となり、その結果、私が指名され帰国するまで二年間、班員の世話役を勤めた。

六 夢に見たダモイ、ヤポン

昭和二十四年七月中旬、待ちに待った帰国命令が出て、運よく第一陣に入り、ライチハ駅へ行進する。沿道には多くの市民が見送ってくれて、女性など、涙を流していつまでも手を振って別れを惜しんでくれた。ソ連の体制はよくないが、一般市民は人情があり、どこの国も変りはないと思つた。

輸送は有蓋車(六十トン)、二段ベッドに詰め込まれる。約千人単位の帰国列車が編成され、一路

ナホトカ港に向う。ソ連は鉄道輸送が多く、五十車両以上連結し猛スピードで走っている。我々は臨時便のためか、いったん停車すると何時間も待たされ、ある時は朝発車して午後二時ごろまで停車しない事もあった。そこで、一番困る事はトイレ休憩ができない事と、食堂車が中央なので停車中のみ運搬できるので、時間は不規則だが車中で飲食しながら我慢の連続に堪えられた。また何もする事が無いから、食べ物の話と思ひ出話。先ず心配なのは、敗戦後の日本で我々はどうなるか心配の声も多かった。シベリアは広く、走れど草原が続く。時たまコルホーズらしき集落が見える。

大分ナホトカが近づいたらしく沿海州の森林地帯に入り、長いカラマツ林と白樺林を通り抜け、出発して三昼夜くらいで待望のナホトカに到着した。海岸地帯には簡単なバラックや引揚者用の急造の建物が建ち並んでいる。どこを見てもシベリア各地からの引揚者であふれ、遠くはウクライナ、バイカル湖周辺から一カ月くらいかかり着いたとか、

大変な人の波である。ここで引揚船が入港するまで急造の収容所に入り、作業をしながら四、五日待機したと思う。またここでも、アクチーブから夜は共産主義教育を受ける。

待つ身の一日の長い事。ようやく入港して乗船すると、船員さんと白衣の看護婦さんから「長い間、ご苦労さまでした」の言葉を聞き、ようやく実感が湧き、嬉し涙で胸いっぱいになった。特に日本女性と対面するのは五年ぶり。大柄なソ連女性ばかり見ていたので小さく感じたが、すごく美人に見えた。そのうち棧橋が外され錨を引き揚げる音がすると、ボーツと汽笛が鳴り、心地よく聞こえ、本当に日本へ帰れるのだと、今まで何年も騙され続けてきたので更に実感が改めて湧く。

「シベリア、永遠にサヨナラ」と船は静かに岸壁を離れ、夕日の輝く外の海に出る。明日いよいよ待望の舞鶴に上陸するかと思うとなかなか寝つかれない。位置は日本海の真ただなか、船はかなり揺れたが、気持ちの問題か船酔いする者はい

なかった。翌日の朝食と昼食は久し振りの日本食で、白く光る米飯、新鮮な野菜と鮮魚料理は格別で、味わう間もなく胃の中に入る。昼食後「日本が見えたぞ」の一声に全員甲板に上がり万歳を叫ぶ者もおり、船内は沸き返る。そして地平線のかなたを見ると、長く横たわった日本の陸地が近づき風景がはつきりして、船は静かに舞鶴に入港した。

棧橋には婦人会を初め沢山の迎えの人々が日の丸の小旗を振りながら「長い間、ご苦労様でした」の言葉に感無量となる。だが、そこには米国のMPの姿があり、日本は敗戦で占領されているのだと、日本の情勢は全く分らないから、これからどうなるかと一抹の不安を感じる。上陸した海軍の兵舎のお湯タツプリの大浴場でシベリアの垢を流した爽快な気分は、私の人生で二度とないだろう。二、三日厚生省の役人やMPの聞き取り調査を受け、故郷までの鉄道切符と金二千円を受領し被服類を支給される。しかし戦後の物価の変動は知る

由もなかつたが、駅弁百円で十分分った。苦労を共にした戦友との別れもそこに引揚列車に乗車する。途中、各停車駅で舞鶴と同様に婦人会の大歓迎で、お茶の接待を受けて感激する。松江駅頭に着くと、県世話課の方が列車に乗り込み丁寧な挨拶を受け、手配しているから一泊するよう申し入れがあつたが、迎えの弟が地元でも歓迎行事があるとの事で丁重に断わる。

五年ぶりの我が家は懐かしく、当夜の田舎料理と酒の味は格別で、五十八年前の出来事となる。

七 おわりに

私が無事生還した運の良さは、入隊二年前渡満し現地入隊した事にある。もし日本にいたならば確実に浜田連隊へ入隊し、中国か南方戦線に派遣され、同級生が四人戦死した事を思えば、渡満は生死の別れ道であつたと思われる。抑留者は苦難の連続であつたが、考えようによつては、今日生があるのはシベリア抑留のお陰かも知れない。しかしながら思うに、ソ連参戦により国境線付近の

戦場で戦死した多くの日本兵と、シベリアの荒野で戦後、無念の死を遂げた戦友を思うと残念で仕方がない。また八月になり、開戦日前後、急遽電話で召集した奥地の開拓団員を初め一般地方人を、武器も十分ないのになぜ員数だけを揃えたのか、軍の方針は不可解だ。残された女子供の家族は大変な苦勞をしながら一年後に帰国したようだ。さらに憲兵、特務機関員、警察官等は、一方的に反ソ活動によるスパイ容疑で帰国させなかつた。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三（一九二四）年八月二十四

日生

現住所 島根県大田市大田町

軍隊の略歴

昭和二十年三月 黒河省国境守備隊入隊

昭和二十年八月 独立混成七九八大隊

昭和二十年八月 瓊瑯県西山で武装解除

昭和二十年十月 ライチハ收容所

昭和二十四年七月 舞鶴港上陸 復員

復員後の略歴

昭和二十五年四月 島根県職員に採用

昭和五十八年三月 県職員定年退職

平成四年七月 シベリア慰霊訪問

現在は、平成七（一九九五）年から全抑協大田
市支部長と県連合会副会長として会員の指導と会
の運営に尽力している。

（島根県 本田 吉則）

思い出の記

入隊からシベリア抑留のトピックス

大阪府 前田 康

私は昭和十七（一九四二）年一月から入隊する
昭和二十年三月まで西のパリと言われた満州国ハ
ルピン市に本店を置き、日、満、支間の貿易及び
販売（食品、酒、ビール、建材雑貨）を手広く行
っていた光武商店に勤務していました。

昭和十九年戦局の悪化に伴い、これまで徴兵検
査は二十歳で甲種合格者だけが現役入隊していた
のが、この年から十九歳で検査を受け第三乙種ま
で現役入隊することになった。

昭和二十年三月十五日にハルピンの郊外の香坊
（ハルピン麦酒の大きな工場があった）の外れに
所在していた関東軍第四三七〇部隊（第一装甲列
車部隊）に現役歩兵新兵として入隊しました。昭
和二十年八月に終戦になり、関東軍将兵は牡丹江